



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈モンテネグロ語〉の境界：ユーゴスラヴィア解体以降の言語イデオロギーにおける「言語」の再編 (2007-2011)
Author(s)	中澤, 拓哉
Citation	境界研究, 4, 15-30
Issue Date	2013-11-29
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.4.15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61181
Type	departmental bulletin paper
File Information	02Nakazawa.pdf, 本文



〈モンテネグロ語〉の境界

——ユーゴスラヴィア解体以降の言語イデオロギーにおける 「言語」の再編（2007-2011）——

中澤 拓哉

はじめに

人間が用いることばを区分する際、なにを「言語」としなにを「方言」とするかについて、もとより明確な基準は存在しない。社会言語学は、「言語」の境界は恣意的に構築されたものであることを明らかにしてきた。荒井幸康がいうように、「言語自体の相違が必然的に言語を生み出しているのではなく、政治的な方針によって言語の外部にあるものを排除し、内部の多様性を抑えることによって」⁽¹⁾新しい言語は成立しているのである。そこでは、言語の「対外的境界(external border)」と「内なる境界(internal border)」の二つの境界が再編されている。ある行為主体は、境界線を引くという作業の中で、その境界線の「外部」に位置づけられた存在(=「かれら」)とみずからとを差異化することによって区別し、その「内部」に位置づけられた存在(=「われわれ」)のあいだに存在する様々な境界線の存在を消し去ろうとする。境界線を引くという行為は、「対外的境界」を創り出し、「内なる境界」を解消しようとする作業でもある⁽²⁾。それは、民族が創出される際に行われる境界編成にも当て嵌まる。トマシュ・カムセラは次のようにいう。「要するに、『民族(nation)』と『言語』という語は類似した機能を担っているのだ。それらは単に帰属を示すラベルに過ぎない、なぜなら、ある集団が民族の地位に、あるいはある方言／クレオール連続体の一部が言語のレヴェルに、どのように昇格すべきかを規定する手続きなどはないのだから。それらは恣意的な決定なのである」⁽³⁾。特にヨーロッパでは、言語の差異はそのまま民族の差異と結びつけて語られやすい⁽⁴⁾。ゆえに、民族を構築する過程において、しばしば「言語」の構築

(1) 荒井幸康『「言語」の統合と分離：1920－1940年代のモンゴル・ブリヤート・カルムイクの言語政策の相関関係を中心に』三元社、2006年、211頁。

(2) 境界線を引くという行為が「集团的同一性」という虚構を構築することについて、小坂井敏晶『[増補]民族という虚構』ちくま学芸文庫、2011年、28-44頁。その境界線を引くという行為の恣意性については、杉田敦『境界線の政治学』岩波書店、2005年、17-22頁。

(3) Tomasz Kamusella, *The Politics of Language and Nationalism in Modern Central Europe* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2008), p. 26.

(4) Jan Blommaert and Jef Verschueren, "The Role of Language in European Nationalist Ideologies," in Bambi B. Schieffelin, et al., eds., *Language Ideologies: Practice and Theory* (New York: Oxford University Press, 1998), pp. 192-193.

が重要な意味を持つ。そして構築された言語は、単なる日常言語としての意味を超えて、集団の境界標識としての役割をも担い得るのである⁽⁵⁾。

本稿は、「言語」の境界編成はどのような論理によって行われているかを検討することで、「言語」の境界が構築される過程の一端を描き出すことを目的とする。1990年代初頭の旧ユーゴスラヴィア⁽⁶⁾解体に伴って、かつてユーゴスラヴィアにおいて連邦レベルで用いられていた「セルビア・クロアチア語／クロアチア・セルビア語(srpskohrvatski jezik/hrvatskosrpski jezik)」⁽⁷⁾は、「ボスニア語」「クロアチア語」「セルビア語」そして「モンテネグロ語」へと分裂した⁽⁸⁾。このほかにも、「ブニェヴァツ語」や「ゴーラ語」といった言語を新しく作り上げようとする動きもある⁽⁹⁾。本稿で取り上げるのは、そのうちモンテネグロにおける「モンテネグロ語」（以下、基本的に括弧は省いて表記する）の創出である。新しく作られたモンテネグロ語はどのような言語イデオロギー⁽¹⁰⁾に支えられているのだろうか。

(5) 庄司博史「民族境界としての言語」『民族の生成と論理(岩波講座文化人類学5)』岩波書店、1997年、91頁。言語は人びとが認識する世界を分断し、差異を再構築する機能を果たす。Rogers Brubaker, “Language, Religion and the Politics of Difference,” *Nations and Nationalism* 19, no. 1 (2013), p. 16.

(6) 以下、特に断りのない場合は、「ユーゴスラヴィア」とは、1918年に「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国」として建国され、第二次世界大戦中に枢軸国により分割され消滅し、戦後に社会主義に基づいた連邦として建国され、1992年にセルビアとモンテネグロの二共和国によるユーゴスラヴィア連邦共和国(新ユーゴスラヴィア)の建国によって最終的に消滅した国家を指す。

(7) 印欧語族スラヴ語派南スラヴ語群に属す言語。1850年のウィーン協定で単一の言語とされ、1957年のノヴィ・サド(Novi Sad)合意において、セルビア人、クロアチア人、モンテネグロ人の三民族(のちにムスリム人も加わり四民族)に共通の言語だと定式化された。以下、同言語の概説的な記述については、Wayles Browne, “Serbo-Croat,” in Bernard Comrie and Greville G. Corbett, eds., *The Slavonic Languages* (London: Routledge, 1993), pp. 306-387; Robert D. Greenberg, *Language and Identity in the Balkans: Serbo-Croatian and Its Disintegration*, updated edition (Oxford: Oxford University Press, 2011), pp. 16-57に拠っている。社会主義ユーゴスラヴィアでは単一の連邦公用語が設定されていたわけではなかったが、実質的にはセルビア・クロアチア語がその役割を担っていた。Kenneth E. Naylor, “The Sociolinguistic Situation in Yugoslavia, with Special Emphasis on Serbo-Croatian,” in Ranko Bugarski and Celia Hawkesworth, eds., *Language Planning in Yugoslavia* (Columbus: Slavica, 1992), pp. 81-83.

(8) かつて「セルビア・クロアチア語」を構成していた諸言語は現在も相互理解度が非常に高く、一部の国際機関では事務処理上単一の言語として扱われることすらある。その総称として、それぞれの言語名の英語での頭文字を並列した「BCS」や「BCMS」なども使われることがあるが、本稿では、政治的に正しくはないがより人口に膾炙している「セルビア・クロアチア語」を、かつて存在するとされていた単一の言語の名称としてのみならず、その後継諸言語の総称としても用いる。名称をめぐる問題については、Vanessa Pupavac, “Discriminating Language Rights and Politics in the Post-Yugoslav States,” *Patterns of Prejudice* 40, no. 2 (2006), p. 121も参照。また、国際機関におけるこの言語の扱いについては、齋藤厚「旧ユーゴスラヴィア、セルビア・クロアチア語の分裂におけるヨーロッパの対応」『ヨーロッパの多言語主義はどこまで来たか(別冊ことばと社会1)』三元社、2004年、109-120頁。

(9) 野町素己「境界のスラヴ語『ゴーラ語』を考える」『スラブ研究センターニュース』128号、2012年、22-25頁。近年のこういった少数言語運動は、「スラヴ・ミクロ文語」として把握されることもある。「スラヴ・ミクロ文語」については、野町素己「東欧に架かる言葉の虹：境界の詩人オンドラ・ウィソホルスキとその言葉」柴宜弘ほか編『東欧地域研究の現在』山川出版社、2012年、205-210頁。

(10) 言語イデオロギーとは、その言語の価値などの様々な事柄に対して人びとが懐いている観念である。Bernard Spolsky, *Language Policy* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), p. 14. 言語イデオロギーをどの水準で見出すかについては、言語についての明示的な言説から読み取ろうとする立場と、実際の言語使用の中に見出そうとする立場がある。Kathryn A. Woolard, “Language Ideology as a Field of Inquiry,” in Schieffelin,

そしてそのイデオロギーは、どのように内外の境界を再編しようとしているのだろうか。従来の研究ではそれらのテーマはあまり扱われてこなかったが⁽¹¹⁾、言語の構築が民族の構築にとって重要な意味を持つ以上、モンテネグロにおける民族の構築、ひいてはユーゴスラヴィア解体後の民族問題を考える上で、言語イデオロギーの検討は重要な意味を持つはずである。

本稿で用いる資料は、2009年に告示⁽¹²⁾された『モンテネグロ語正書法およびモンテネグロ語辞書』⁽¹³⁾、およびそれに携わった言語学者アドナン・チルギチ (Adnan Čirgić, 1980-) の著作『過去と現在のモンテネグロ語』⁽¹⁴⁾である。『正書法』は、執筆者三人のうち二人が非モンテネグロ人であるという「逆説」⁽¹⁵⁾を抱えているが、それでもモンテネグロ政府によって告示された正式な正書法であり、モンテネグロ語を支える公的な論理をそこから読み取ることができるであろう。チルギチは、後述するニクチェヴィチのもとで研究し、「モンテネグロ語の最初の博士」⁽¹⁶⁾と呼ばれる言語学者である。後述する標準化委員会の委員にも選任され⁽¹⁷⁾、モンテネグロ語を支持する代表的な言語学者の一人となっている。『過去と現在のモンテネグロ語』は、モンテネグロ文部スポーツ省の助成を得て、2011年にモンテ

et al., eds., *Language Ideologies* (前注4参照), p. 9. 木村護郎クリストフはそれらの議論を受け、「より暗示的でない言語が直接の話題でない場合の言語に関する表明、さらには直接言語に関することでもなくとも、言語と関連することがらについての表明や行動までを含めて言語イデオロギーを考察するのが妥当」であるとする。木村護郎クリストフ『言語にとって「人為性」とはなにか: 言語構築と言語イデオロギー—ケルノウ語・ソルブ語を事例として』三元社、2005年、46頁。本稿ではひとまず明示的な言語についての言説を分析対象として、モンテネグロ語を支える言語イデオロギーの論理について考察することにした。

- (11) モンテネグロの言語イデオロギーに関する数少ない先行研究として、アンドレア・トロヴェーズィの研究が挙げられる。Andrea Trovesi, “La codificazione della lingua montenegrina: Storia di un’idea,” *Studi Slavistici* 6 (2009), pp. 197-223. 彼は正書法を中心とした資料を丁寧に分析し、モンテネグロ語の規範化とモンテネグロ語理念の形成を論じており、モンテネグロ語についてナショナリズム研究や現代史の観点から論ずる上で彼の研究は欠かせない。本稿では彼の研究を参考にしつつも、彼が取り上げていない言語学者の著作を利用し、モンテネグロの言語イデオロギーについて新しい見方を提示したいと思う。なお、本稿脱稿後、新たにモンテネグロの言語イデオロギーについての研究が刊行された。Tatjana Radanović Felberg and Ljiljana Šarić, “Discursive Construction of Language Identity through Disputes in Croatian and Montenegrin Media,” *Scando-Slavica* 59, no. 1 (2013), pp. 7-31. この論文はメディアの論調からモンテネグロ語イデオロギーを扱ったもので、用いている資料が異なることから本稿に影響はないが、本稿とは異なった視点からモンテネグロ語イデオロギーを捉えており、非常に有意義な研究である。
- (12) “Rješenje o Pravopisu crnogorskoga jezika i Rječnik crnogorskoga jezika (pravopisni rječnik),” *Službeni list Crne Gore* 49/2009, p. 1.
- (13) Milenko Perović, Josip Silić and Ljudmila Vasiljeva, *Pravopis crnogorskoga jezika i Rječnik crnogorskoga jezika* (Podgorica: Ministarstvo prosvjete i nauke, 2009).
- (14) Adnan Čirgić, *Crnogorski jezik u prošlosti i sadašnjosti* (Podgorica: Institut za crnogorski jezik i književnost/ Matica crnogorska, 2011).
- (15) Юдова, Ю. Ю. Что такое черногорский язык? // Язык, сознание, коммуникация. 2011. № 43. С. 6. ミレンコ・ペロヴィチ (Milenko Perović) はモンテネグロ人だが、ヨスィプ・スィリチ (Josip Silić, 1934-) はクロアチア人、リュドムィラ・ヴァスィリイェヴァ (Ljudmyla Vasylijeva, 1957-) はウクライナ人である。
- (16) Greenberg, *Language and Identity in the Balkans* (前注7参照), p. 99, n. 23. ただし博士号はザグレブ大学で取得している。博士論文はポドゴリツァ (Podgorica) のムスリム人の方言についての研究であった。Юдова. Что такое черногорский язык? (前注15参照), С. 6-7.
- (17) “Odluku o obrazovanju Savjeta za standardizaciju crnogorskog jezika,” *Službeni list Crne Gore* 10/ 2008, p. 1.

ネグロ語・文学研究所とマティツァ・ツルノゴルスカ (Matica crnogorska)⁽¹⁸⁾から出版された。本稿で検討する言説はいずれもモンテネグロの言語政策の枢要に携わり、モンテネグロ語の標準化を推進する人びとによるものであり、モンテネグロ語を支える典型的なイデオロギーをそこに見出すことができるのではないかと考えられる。

本稿では、まず第1章でモンテネグロにおける言語政策を概観した後、第2章と第3章において、上述の資料をモンテネグロ語の「内なる境界」と「対外的境界」の二つの境界に着目して分析する。

1. モンテネグロ語創出の政治過程

本章では、モンテネグロ語について検討するための前提として、社会主義期以降のモンテネグロにおけるナショナリズムと言語政策について概観する⁽¹⁹⁾。

社会主義ユーゴスラヴィアにおいて、それまでは同じく正教徒⁽²⁰⁾であるセルビア人の一部と見なされることの多かったモンテネグロ人⁽²¹⁾は独自の民族(narod)⁽²²⁾とされ、モンテネグロ人民共和国(のち社会主義共和国)が設置された。この時期にモンテネグロでは近代

(18) 1993年にツェティニェ (Cetinje) で設立された民族団体。「マティツァ」は「女王蜂」を、「ツルノゴルスカ」は「モンテネグロの」を意味する。19世紀にはハプスブルク君主国および近隣のスラヴ諸民族のあいだで民族文化の保護・振興のために「マティツァ」の名を冠した団体が次々と設立された。そして近年、新たに「民族」としての自覚を強めた集団によって新たにマティツァが設立されるようになっており、マティツァ・ツルノゴルスカはその一つである。

(19) より詳しい検討は、以下の拙稿を参照。中澤拓哉『モンテネグロ語』の創出：ユーゴスラヴィア解体以降の言語政策と言語状況(1992-2011)、『ことばと社会』15号、2013年、185-193頁。

(20) モンテネグロにおける正教会は、1920年にセルビア正教会に統合されるまで自律した組織を有していたが、それが教会法上の独立正教会にあたるかどうかについては論争がある。モンテネグロ独立派はそれを独立正教会であったと主張し、1993年に「モンテネグロ正教会」を「再建」したが、独立派やセルビア正教会、セルビア政府はそれを承認していない。Kenneth Morrison, *Montenegro: A Modern History* (London: I. B. Tauris, 2009), pp. 138-139; Milan Vukomanović, “The Serbian Orthodox Church as a Political Factor in the Aftermath of October 5, 2000,” *Politics and Religion* 1, no. 2 (2008), pp. 251, 253. なお、ロシア正教会による『正教百科事典』は、モンテネグロの教会を独立正教会であったとしている。Цыпин, прот. Владислав. Автокефалия // Православная энциклопедия. Т. I. М., 2000. С. 199-202.

(21) 近代以降のモンテネグロでは、モンテネグロ人を「セルビア人の精髓」「セルビア人の中のセルビア人」と位置づける形で、「セルビア人」意識と「モンテネグロ人」意識が併存していた。Srđa Pavlović, “Who Are Montenegrins? Statehood, Identity, and Civic Society,” in Florian Bieber, ed., *Montenegro in Transition: Problems of Identity and Statehood* (Baden-Baden: Nomos, 2003), pp. 93-97. 王国期および戦間期におけるモンテネグロの民族意識については、Ivo Banac, *The National Question in Yugoslavia: Origins, History, Politics* (Ithaca: Cornell University Press, 1984), pp. 277-291.

(22) セルビア・クロアチア語の narod は、「民族」「人民」などを意味する多義的な語であるが、社会主義ユーゴスラヴィアの民族政策の文脈では、自決権を行使してユーゴスラヴィアを建国した南スラヴの五民族(スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人、モンテネグロ人、マケドニア人。のちムスリム人が加わり六民族)を指す。社会主義ユーゴスラヴィアにおける「民族」の意味について、Audrey Helfant Budding, “Nation/People/ Republic: Self Determination in Socialist Yugoslavia,” in Lenard J. Cohen and Jasna Dragović-Soso, eds., *State Collapse in South-Eastern Europe: New Perspective on Yugoslavia's Disintegration* (West Lafayette: Purdue University Press, 2008), pp. 103-104; 鈴木健太「結合と分離の力学：社会主義ユーゴスラヴィアにおけるナショナリズム」柴ほか編『東欧地域研究の現在』(前注9参照)、328-330頁。

的インフラが整備され、国立文書館、大学などが設置され、識字率が上昇した⁽²³⁾。だが社会主義期において、モンテネグロ・ナショナリズムは殆ど影響力を持たず、モンテネグロ文芸協会などの少数の知識人集団を除いては⁽²⁴⁾、「モンテネグロ人」意識と「セルビア人」意識は矛盾することなく併存していた。

1990年代のユーゴスラヴィア解体の過程において、クロアチアやボスニアでは「セルビア語的」語彙の排除や新正書法の策定などの言語造成が行われたが、セルビアとともに新ユーゴスラヴィアを建国したモンテネグロでは、1992年の憲法で「セルビア語のイエ方言」が公用語とされることが規定された⁽²⁵⁾。これに対して、国際PENクラブでの言語権についての宣言採択を契機として、1996年に「憲法におけるモンテネグロ語の地位に関する宣言」がモンテネグロPENセンター（1990年設立）によって発せられるなどした⁽²⁶⁾。1990年代を通して活動した言語学者ヴォイスラヴ・ニクチェヴィチ (Vojislav Nikčević, 1935-2007) は、『モンテネグロ語正書法』など「モンテネグロ語」に関する著作を何冊も発表し、モンテネグロ語の規範化を強く主張したが、それは公式のものにはならなかった⁽²⁷⁾。それは、ブラニスラヴ・オストイチ (Branislav Ostojić, 1940-) らの反対する言語学者らにとってみれば、非科学的でセルビア人に対して排他的な「言語もどき」にすぎなかった。彼らは、言語学的にはモンテネグロ語はセルビアで用いられている言語と変種程度の差異しかないと主張し、モンテネグロ語を創出しようとする主張を言語への人為的な介入だとして批判した⁽²⁸⁾。こ

(23) Siniša Malešević and Gordana Uzelac, “A Nation-State without a Nation? The Trajectories of Nation-Formation in Montenegro,” *Nations and Nationalism* 13, no. 4 (2007), pp. 701-703.

(24) ノヴィ・サド合意(前注7参照)においてモンテネグロへの言及が乏しいことや、セルビアで出版されたセルビア人作家の作品を集めた叢書に19世紀のモンテネグロの主教公ニェゴシュ（後注68参照）の作品が収録されたことなどを問題視した知識人も存在した。そのうちの一人、ブランコ・バニェヴィチ (Branko Banjević) は、のちにマティツァ・ツルノゴルスカの総裁となり、モンテネグロ語標準化委員会の委員長を務めることになる。Ksenija Cvetković-Sander, *Sprachpolitik und nationale Identität im sozialistischen Jugoslawien (1945-1991): Serbokroatisch, Albanisch, Makedonisch und Slowenisch* (Wiesbaden: Harrassowitz, 2011), pp. 268-269; Vladimir Dulović, “Socialist Intercessions: The Earliest Demands for a Separate Montenegrin Language (1967-1972),” *History and Anthropology* 24, no. 1 (2013), pp. 172-176; “Odluku o obrazovanju Savjeta za standardizaciju crnogorskog jezika” (前注17参照), p. 1.

(25) Rajka Glušica, “Jezička politika u Crnoj Gori,” *Riječ* 1 (2009), p. 26.

(26) Васильева, Людмила. Суспільна зумовленість існування чорногорської мови // Вісник Львівського університету. Серія філологічна. 2009. № 46 (2). С. 52; 三谷恵子「ユーゴ連邦崩壊後の言語状況：セルビア・クロアチア語圏を中心に」『現代文芸研究のフロンティア I』北海道大学スラブ研究センター、2000年、134頁。

(27) Robert D. Greenberg, “From Serbo-Croatian to Montenegrin? Politics of Language in Montenegro,” in Ranko Bugarski and Celia Hawkesworth, eds., *Language in the Former Yugoslav Lands* (Bloomington: Slavica, 2004), pp. 53-64; Gabriella Schubert, “Montenegrinisch,” in Miloš Okuka, ed., *Lexikon der Sprachen des europäischen Ostens* (Wieser Enzyklopädie des europäischen Ostens, vol. 10) (Klagenfurt: Wieser, 2002), pp. 319-321; Vladimir Vojinović, “Vojislav Nikčević (1935-2007),” *Riječ* 1 (2009), pp. 255-257; 三谷恵子「言語の〈自立〉と社会：ユーゴスラヴィア (SFRJ) 崩壊から10年を経て」『Dynamis』6号、2002年、40-41頁。

(28) Bernhard Gröschel, *Das Serbokroatische zwischen Linguistik und Politik: Mit einer Bibliographie zum postjugoslawischen Sprachenstreit* (Munich: LINCUM, 2009), pp. 301-302; Сњежана Кордић, “Црногорска стандардна варијанта полицентричног стандардног језика,” in Branislav Ostojić, ed., *Jezička situacija u Crnoj Gori: Norma i standardizacija* (Podgorica: Crnogorska akademija nauka i umjetnosti, 2008), p. 38; Trovesi, “La

の論争は、同時期にセルビアで行われていた、エ方言以外のイエ方言等をセルビア語の規範から排除するか、それともセルビア人が用いてきた発音をすべて「セルビア語」の中に包摂するか、という論争⁽²⁹⁾と対応関係にある。オストイチは民間によるセルビア語の正書法策定に携わり、イエ方言をセルビア語の発音として認容することを主張していた⁽³⁰⁾。つまり、一方には「純粋なセルビア語／モンテネグロ語」があり、もう一方には「多様な発音を包摂するセルビア語」⁽³¹⁾があったのである。ニクチェヴィチは前者を、オストイチは後者を代表していた。そして後者のような立場は、前者の立場からみれば、親セルビア的な一部のインテリの反撥であった⁽³²⁾。一方で後者からみれば、前者は言語学的に同一言語といえるほどの違いしかないところに無理やり言語を創り出そうとする政治的な言語の創出であった。

政治的な動きについてみると、1990年代前半にはモンテネグロ独立を主張する政党が議会に進出していたものの、あくまで少数野党に留まり、その一方でセルビアとの結びつきをよりいっそう強めることを主張する親セルビア派政党が結党されるなど、分離主義はそれほど強い勢力ではなかった⁽³³⁾。しかし、ユーゴスラヴィア内戦における「民族浄化」などによって新ユーゴスラヴィアの国際的孤立が深まると、1997年のモンテネグロ大統領選挙をきっかけに、文化的・歴史的要因からではなく政治的・経済的要因によるモンテネグロ分離主義が昂揚し、2006年の独立に至る⁽³⁴⁾。この過程で、従来国勢調査で「モンテネグロ人」

codificazione della lingua montenegrina” (前注11参照), p. 202. ここには、「自然」と「人為」を峻別し、「自然」な言語に手を入れるべきではないという言語観があらわれているといえよう。そのような二分法が実際には成り立たないことについては、木村護郎クリストフ「言語における『自然』と『人為』：説明用語から分析対象へ」『ことばと社会』10号、2007年、121-131頁。

(29) この論争について詳しくは、Greenberg, *Language and Identity in the Balkans* (前注7参照), pp. 77-83; 齋藤厚「新ユーゴにおける1990年代のセルビア語論争：旧ユーゴ解体後のセルビア人の言語意識」帯谷知可、林忠行編『スラブ・ユーラシア世界における国家とエスニシティⅡ』国立民族学博物館、2003年、22-24頁。

(30) Greenberg, *Language and Identity in the Balkans* (前注7参照), p. 71.

(31) この「多様な発音を包摂するセルビア語」という主張の中には、イエ方言もセルビア人が歴史的に用いてきたもののだから尊重すべきだという穏健なものから、クロアチア語もボスニア語もすべてセルビア語の変種であり、クロアチア人やボシュニャク人は「カトリック・セルビア人」「イスラーム・セルビア人」なのだという極端なものまで含まれていた。オストイチらは前者の穏健なグループに属す。Sven Gustavsson, *Standard Language Differentiation in Bosnia and Herzegovina: Grammars, Language Textbooks, Readers* (Uppsala: Centre for Multiethnic Research, 2009), p. 227; Paul-Louis Thomas, “Le serbo-croate (bosniaque, croate, monténégrin, serbe): De l’étude d’une langue à l’identité des langues,” *Revue des études slaves* 74, no. 2-3 (2002), p. 319.

(32) Васильева, Людмила. Черногорська мова сьогодні (соціолінгвальний аспект) // Мова і суспільство. 2010. № 1. С. 125-126.

(33) Florian Bieber, “Montenegrin Politics since the Disintegration of Yugoslavia,” in *idem.*, ed., *Montenegro in Transition* (前注21参照), p. 20; Amaël Cattaruzza, “Identités en mouvement: La redéfinition du nationalisme monténégrin dans les crises yougoslaves,” *Revue d’études comparatives Est-Ouest* 35, no. 1-2 (2004), pp. 362-363.

(34) Steven C. Calhoun, “Serbia and Montenegro: The Struggle to Redefine Yugoslavia,” *European Security* 9, no. 3 (2000), p. 72; 柴宜弘「連合国家セルビア・モンテネグロの解体：モンテネグロの独立とEU」『海外事情』54巻6号、2006年、89-90頁。当初、分離主義派はセルビアとの連合を維持することの政治的・経済的デメリットを議論の中核に据えたが、セルビアで「ブルドーザー革命」による「民主化」が生じて以後は、「民族の権利」としての独立を訴えるようになっていった。Nina Caspersen, “Elite Interests and the Serbian-Montenegrin Conflict,” *Southeast European Politics* 4, no. 2-3 (2003), pp. 116-117.

と名乗っていた人びとの一部が北部を中心に「セルビア人」と名乗るようになり、モンテネグロ全体で「セルビア人」が人口比の三割を占めるようになるなど、国内の民族構成が大幅に変化した。久保慶一は、この民族帰属の変化を、南部に比して相対的に開発が立ち後れており、セルビアとの経済的関係が緊密な北部において、独立反対派がみずからを「セルビア人」と再定義した結果であると分析している⁽³⁵⁾。これによって国内の独立をめぐる政治対立は少数民族問題へと転化することになった。

独立後、2007年にモンテネグロは憲法を改正し、国号を「モンテネグロ共和国」から「モンテネグロ」に変更、公用語を「モンテネグロ語」とした⁽³⁶⁾。セルビア人政党は、モンテネグロ人とセルビア人の国家構成民族としての対等、セルビア語の公用語としての維持などを要求したが、それらの条項は書き入れられなかった⁽³⁷⁾。2008年にモンテネグロ語標準化のための委員会が設置され、2009年に『モンテネグロ語正書法およびモンテネグロ語辞書』が、2010年に『モンテネグロ語文法』⁽³⁸⁾が出版された。『正書法』や『文法』によって、新しく *š*, *ž* の二つの文字が導入され、モンテネグロ「独自」の言語特徴が規範化された。これによってモンテネグロ語はひとまず標準化されたといえることができる。以下では、その標準化を推進した人びとの著作を検討することで、それがどのような言語イデオロギーに基づいたものなのかを明らかにしていく。

(35) 久保慶一「モンテネグロにおける独立問題と民族アイデンティティ」『ロシア・東欧研究』33号、2004年、76-78頁。

(36) Устав Црне Горе // Службени лист Црне Горе. 1/ 2007. С. 1, 3. またセルビア語、ボスニア語、アルバニア語、クロアチア語も公的に用いることができるとされた。

(37) “Ustavne odredbe i alternative,” *Pobjeda* (March 26, 2007); Robert Bońkowski, *Słowianie środkowopólniowi na przełomie XX i XXI wieku: Język – Religia – Naród – Państwo* (Katowice: Uniwersytet Śląski w Katowicach, 2010), pp. 256-257; Vojin Dimitrijević, “Constitutional Ethno-Nationalism after Fifteen Years,” in Robert Hudson and Glenn Bowman, eds., *After Yugoslavia: Identities and Politics within the Successor States* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2012), p. 22; Greenberg, *Language and Identity in the Balkans* (前注7参照), p. 178; 久保慶一「旧ユーゴスラビア諸国の政党システム：専門家サーベイの結果に基づく政党の『政策位置』の測定」仙石学、林忠行編著『ポスト社会主義期の政治と経済：旧ソ連・中東欧の比較』北海道大学出版会、2011年、172頁。新憲法では、モンテネグロは「市民的」国家であるとの規定が採用されたが、これは与党の社会民主主義的立場を示すものであると同時に、人口の三割を占めるセルビア人を国家構成民族として認めることで生じる権力分有などの問題を回避するためであったと考えられよう。Jelena Džankić, “Understanding Montenegrin Citizenship,” *Citizenship Studies* 16, no. 3-4 (2012), p. 339. つまり、「少数民族」による多文化主義的要求を封殺するために、市民的ナショナリズムの論理が持ち出されているのである。いわゆる市民的ナショナリズムの論理が、東欧の新独立国において、国家の正統化原理や少数民族の要求を封殺する際の論拠として用いられていることを指摘した文献として、Rogers Brubaker, *Ethnicity without Groups* (Cambridge: Harvard University Press, 2004), p. 134; ウィル・キムリッカ著、岡崎晴輝ほか監訳『土着語の政治：ナショナリズム・多文化主義・シティズンシップ』法政大学出版局、2012年、387頁。モンテネグロの政党の少数民族に対する態度については、Keiichi Kubo, “Origins and Consequences of One-Party Dominance: Comparative Analysis of Ex-Yugoslav Countries,” *The Waseda Journal of Political Science and Economics* 367 (2007), p. 82.

(38) Adnan Čirgić, Ivo Pranjković and Josip Silić, *Gramatika crnogorskoga jezika* (Podgorica: Ministarstvo prosvjete i nauke, 2010).

2. モンテネグロ語の「内なる境界」

本章では、モンテネグロ語の内部の境界が、どのような論理で再編されているのかを検討する。あらゆる言語は内部に多様性を有するが、ある言語が単一の言語であると主張される際には、その内部における多様性はしばしば捨象されるか、統一を脅かさない程度のものであると矮小化される。そのような言語内部における境界の再編は、モンテネグロ語においてどのようにみられるのであろうか。

まず、正書法の序文を検討したい。そこでは次のように「モンテネグロ語」の根拠が示された。

これまでモンテネグロで公的に用いられてきた諸正書法は、かつてのセルビア・クロアチア語標準語の規範がそうであったように、共通モンテネグロの特徴を考慮していなかった。モンテネグロにおいては、三つの階層を分けることができる。①全シュト方言の言語的層(ボスニア語、モンテネグロ語、クロアチア語、そしてセルビア語に共通)、②全モンテネグロ(コイナー⁽³⁹⁾)の言語的層(すべてのモンテネグロの口語に共通)、③(モンテネグロの地方語に関する)方言的言語特徴、われわれは第一と第二の層に属す現代モンテネグロ語の全ての特徴を成文化した。そしてそこに、これ[新正書法]と二番目の層を方言的であると扱ったような過去のモンテネグロの公式の正書法とのあいだの本質的な差異がある。[……]

[……]モンテネグロ語は方言を超えた特徴を持っているので、その成文化に際して、方言的・規範的形態を弁別することは易しい⁽⁴⁰⁾。

ここでは、個々の方言を超えてモンテネグロという領域で話される方言に一定の共通性があることが述べられている。従来の言語学ではモンテネグロの領域は、それぞれモンテネグロの国境外にも広く分布する二つの方言域(ゼタ＝サンジャク方言と東ヘルツェゴヴィナ方言)に分割されていた(そしてそれは外国の言語学者にも受容されていた)⁽⁴¹⁾ののだが(図参照)、正書法の著者たちは、モンテネグロという領域は一つの言語的まとまりをなしていると主張することで、「モンテネグロ語」が標準化されることを正当化しようとする。それは単なる方言ではなく、モンテネグロにおける「コイナー」であり、それゆえに標準化に値するとされているのだ。

(39) コイナー (koina) とは、元来紀元前4世紀頃に成立した古代ギリシアの共通語のことだが、現代では「原義から転じて、一般に方言を超えた『共通語』の意味でも用いる」。亀井孝ほか編著『言語学大辞典6：術語編』三省堂、1996年、516頁。田原憲和は、言語系統を問わずに用いられる概念であるリンガ・フランカとは区別されるべき概念であると指摘し、当該地域の方言の一つを基盤とし、他の方言の要素と混淆し、その言語圏において超地域的なコミュニケーション手段として用いられる言語、と整理している。田原憲和「ルクセンブルク語コイナーと正書法：都市における共通語創出とその広がり」『都市文化研究』11号、2009年、3頁。

(40) Perović, et al., *Pravopis crnogorskoga jezika i Rječnik crnogorskoga jezika* (前注13参照), p. 5. 以下、引用文中においては、傍点による強調は原文における強調(形態の如何を問わずすべて傍点に統一)を、下線による強調は引用者による強調を示す。また、引用者による省略は[……]で、引用者による補足は[]で示す。

(41) たとえば、Greenberg, *Language and Identity in the Balkans* (前注7参照), p. 93.



図「セルビア・クロアチア語」の通説的な方言分布⁽⁴²⁾

これに続き、正書法の原理について述べられる。

モンテネグロの文章語は伝統的に民衆の(narodni)基盤の上で発展し、19世紀前半に既書き言葉として頂点に達していた。[……]現代の規範研究者においては、口語使用を言語的標準化の基本モデルの一つにする必要があると考えられているが、ヴォイスラヴ・ニクチェヴィチの『話された通りに書き』(ポドゴリツァ:CDNK, 1993年)というマニュアルによって提示された、①話された通りに書き、書かれた通りに読め！ ②使いやすい規範とモンテネグロ語の「一般的な規則」を維持せよ！ そして、③自分たちが発音するように外来語を書け！という主要原則を完全に有効なものとして考え、われわれはそれらをこの正書法の起点として利用する。この原則は、国際学術会議「モンテネグロ語の規範と成文化」(於ツェティニエ、モンテネグロ語・言語学研究所、2005年)で有名な言語学者からも確認された⁽⁴³⁾。

ヴーク・カラジチ(Vuk Stefanović Karadžić, 1787-1864)の有名な言葉「話された通りに書き、書かれたように話す」⁽⁴⁴⁾をもじったフレーズで述べられる正書法の原理は、モンテネグロの口語を基礎に置くことである。また、1990年代から2000年代にかけてオストイチらと

(42) Wayles Browne, “Serbo-Croat,” in Bernard Comrie and Greville G. Corbett, eds., *The Slavonic Languages* (London: Routledge, 1993), p. 383 より筆者作成。

(43) Perović, et al., *Pravopis crnogorskoga jezika i Rječnik crnogorskoga jezika* (前注13参照), p. 5.

(44) 三谷恵子『スラヴ語入門』三省堂、2011年、138頁。

ニクチェヴィチらのグループが相互に自説を支持するシンポジウムを開催したのだが⁽⁴⁵⁾、そのうち後者によって開催されたシンポジウムが論拠として持ち出されており、後者を支持するグループが最終的に言語政策の枢要を占めることになったことを示しているのではないかと考えられる。

続いてチルギチの著書もみよう。彼もまた、モンテネグロ語が「民衆の言語」⁽⁴⁶⁾であることを強調する。彼によれば、「国家の独立の回復によってはじめてモンテネグロ語の独自の標準化のための条件が創出された」⁽⁴⁷⁾のだが、たとえ標準化されなかったとしても、モンテネグロ語の伝統はモンテネグロにおいて生き続けてきたとされるのである。そしてそのことにもっと目が向けられるべきだと説かれる。「何世紀も前からこの地方でコミュニケーションのために用いられているというのに、モンテネグロ語はしばしば、独立回復後に創出された言語としてみられている」⁽⁴⁸⁾。彼は正書法と同様に、モンテネグロ語という実体は歴史的に存在してきたのだと論を立てる。

20世紀にはモンテネグロは多くの言語学者を輩出したとチルギチはいう。彼らの多くはモンテネグロ外で活動したが、モンテネグロとその方言を研究対象とした。「この事実によって、今日われわれはモンテネグロの方言はスラヴ学研究の世界においてもっともよく研究された方言の一つだということができる」⁽⁴⁹⁾。だがその研究者たちは、モンテネグロを二つの主要な方言域に分割できると考えていた⁽⁵⁰⁾。先述したゼタ＝サンジャク方言と東ヘルツェゴヴィナ方言がそれである。その通説的見解が、モンテネグロにおける言語を分断し、そこで話されている言葉をモンテネグロという領域から切り離し、「モンテネグロ」という名称を削ったとしてチルギチは批判する。そして彼は、実際にはモンテネグロにはそのような分断はなく、共通の「モンテネグロ口語」が存在すると論ずるのである。チルギチはその共通要素として「イエ方言」「イエ方言のヨット化」「音素š, ž」「アオリストの活発な使用」など16を挙げている⁽⁵¹⁾。彼にとって特に重要なのがヨット化⁽⁵²⁾である。「モン

(45) Trovesi, “La codificazione della lingua montenegrina” (前注11参照), p. 204.

(46) ここでは narodni を「民衆の」と訳したが、「民族の」と訳すことも可能である(前注22参照)。「民族語(narodni jezik)」という言葉は、セルビア・クロアチア語圏において、「標準語(standardni jezik)」よりも強く感情的・文学的な響きを帯びて用いられる。Przemysław Brom, “Fonemy ś i ż w procesie różnicowania sztokawskiego obszaru językowego,” *Slavia Centralis* 2, no. 1 (2009), p. 76.

(47) Ćirgić, *Crnogorski jezik u prošlosti i sadašnjosti* (前注14参照), p. 21.

(48) *Ibid.*

(49) *Ibid.*, p. 51.

(50) *Ibid.*, pp. 53-54.

(51) *Ibid.*, pp. 62-63.

(52) ヨット化とは、一般的にはjが子音に後続することで子音の性質を変化させる硬口蓋化の一種をいう。原求作『共通スラヴ語音韻論概説』水声社、2008年、106頁。ゼタ＝サンジャク方言では、他の方言ではヨット化が起こらない箇所でもヨット化が起こり、たとえば djevojka という語は他のイエ方言域では「ディエヴォイカ」と読まれるが、ゼタ＝サンジャク方言では「ジェヴォイカ」のように発音される。ニクチェヴィチの正書法では、従来の正書法で sj, zj と書かれていた部分を、ヨット化を反映して新文字 š, ž で書き表すこととされており、それは新正書法にも引き継がれた。

テネグロ大」の広がりを持つヨット化という現象が、他の三つの標準語にはない「モンテネグロ語」独自の要素であると述べられるのだ。チルギチによれば、ニクチェヴィチははじめてその要素をコイナーに属するものと位置づけたのであり、現代の正書法はそれを踏襲している。1863年のカラジチの正書法が「勝利」することで、それらの要素は「方言」とされ、20世紀の言語学はそれを無批判に受け入れてきたのだが、ヨット化は例外なく持続してきたのだ、とチルギチは論じる⁽⁵³⁾。チルギチによれば、「ヴーク・カラジチの言語改革の重要性は誇張されている」⁽⁵⁴⁾。カラジチは口蓋化によって生ずる *š, ž* の音の存在に気付いていたが、それはモンテネグロの地方的な特徴に過ぎないとして彼の正書法から排除されたのだと彼は主張する⁽⁵⁵⁾。そして、彼の主張によるならば、ニクチェヴィチの活動によってはじめて「モンテネグロ学(montenegrinistika)」が創始されたのだった⁽⁵⁶⁾。

ここまでで検討したモンテネグロ語イデオロギーは、従来の言語学が想定してきたモンテネグロにおける言語的境界を否定し、モンテネグロで用いられる口語の共通性を新たに措定することで、モンテネグロの言語的な「内なる境界」を解消しようとしている、といえるであろう。

3. モンテネグロ語の「対外的境界」

本章では、モンテネグロ語の外部との境界を構築する論理を明らかにしていきたい。モンテネグロ語は典型的な造成言語(*Ausbau language*)⁽⁵⁷⁾であり、周囲の言語とのあいだに明瞭な境界線を引けるわけではない。そのような中でモンテネグロ語を確立しようとしている人びとは、どのような論理でモンテネグロ語を周囲の言語から区別しようとしているのだろうか。そしてまた、「われわれ」と対置される「かれら」はどのように設定されているのだろうか。

正書法の著者の一人であるモンテネグロ人言語学者ミレンコ・ペロヴィチ(Milenko Perović)は、ボスニア語、クロアチア語、モンテネグロ語、セルビア語が同一の言語体系に属することを認めた上で、次のように書いている。

[……]もちろん、それら[諸言語]のあいだの差異は顕著なコミュニケーション障壁を作り出すような性質のものではありません。けれども、差異はあるのです！ そしてそれらは四

(53) Čirgić, *Crnogorski jezik u prošlosti i sadašnjosti* (前注14参照), pp. 143-144.

(54) *Ibid.*, p. 21.

(55) *Ibid.*, p. 39.

(56) *Ibid.*, pp. 43-45.

(57) 1967年にハインツ・クロス(Heinz Kloss)が提示した概念。バスク語のような隔絶言語(*Abstand language*)と違い、言語学的に周囲の言語との方言連続体をなしている言語であり、周囲の言語との境界は、言語の地位の法的規定や正書法の策定などの言語計画によってのみ定められる。ルイ＝ジャン・カルヴェ著、西山教行訳『言語政策とは何か』白水社、2000年、23頁。

言語すべての言語的アイデンティティの基礎なのです。四言語すべての言語学的アイデンティティは、四つの南スラヴのナショナルな共同体のナショナル・アイデンティティの本質的な構成要素なのです。それらの共同体における言語的な、そしてナショナルなアイデンティティは、西バルカンの四つの国(モンテネグロ、クロアチア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ)の政治的アイデンティティの構成要素です⁽⁵⁸⁾。

彼はそれらの言語の存在を主張するのは言語学的な議論よりも政治的な議論に依拠することであると自覚しながら、なおもその「権利」を擁護する⁽⁵⁹⁾。「言語は政治的に作られるものである」という社会言語学の基本的テーゼを認めた上で、「モンテネグロ語」の存在を承認することは政治的に正しいのだという論理を彼は用いている。ここには、言語的な基準によってではなく政治的単位によって言語を区画するような「ある種の紳士協定」⁽⁶⁰⁾の意識がみられるかもしれない。彼によれば、ウィーン協定もノヴィ・サド合意もセルビア人とクロアチア人の言語学者のみで決められたのであり、それらは「モンテネグロ語」の存在を否認し続けてきたのである。「セルビア人とクロアチア人の統一」の名のもとに「セルビア・クロアチア語」が作られた際に、ボスニア人とモンテネグロ人の存在は消去され、その言語は周縁化され、ニェゴシュは「セルビアの」詩人と呼ばれることになったのだと彼は論ずる⁽⁶¹⁾。「一般に、モンテネグロ語の存在を否定する長い歴史がある」⁽⁶²⁾のだ。

そして「その歴史は、最終的にモンテネグロの文部科学大臣による2009年のモンテネグロ語標準化委員会の任命で終わりました」⁽⁶³⁾として、正書法策定事業によって「モンテネグロ語」の地歩は確立されたと論ずる。彼はまた、「モンテネグロ語」の原則についてこう述べる。

- 一. モンテネグロ語は一つの体系ですが、一つの独立した体系ではありません。
- 二. モンテネグロ語はシュト方言体系に「属す」のではなく、シュト方言体系がモンテネグロ語の構成要素なのです！
- 三. シュト方言体系はまた、ボスニア語、クロアチア語、セルビア語の体系でもあります。
- 四. モンテネグロ語は標準語ですが、ボスニア、クロアチア、セルビアの標準語が独自のものであるように独自の標準語です⁽⁶⁴⁾。

以上のように、ペロヴィチは「モンテネグロ語」と他の諸語との類縁関係を認めないわけにはいかなかったが、言語学以外の論拠に主に依拠して「モンテネグロ語」の存在に関する

(58) Milenko Perović, “Riječ urednika,” in Čirgić, *Crnogorski jezik u prošlosti i sadašnjosti* (前注14参照), p. 9.

(59) *Ibid.*, pp. 9-10.

(60) Gustavsson, *Standard Language Differentiation in Bosnia and Herzegovina* (前注31参照), p. 33.

(61) Perović, “Riječ urednika” (前注58参照), pp. 10-12.

(62) *Ibid.*, p. 15.

(63) *Ibid.*

(64) *Ibid.*, p. 16.

議論を組み立てている。その言語の多くの部分を他言語と共有していることを認めながら、いかにして「モンテネグロ語」の独自性を主張すべきか、という苦労の跡が彼の叙述からは読み取れる。

チルギチは、モンテネグロ語についてこう述べる。

シュト方言域の標準語の家族のなかで最も新しく標準化された言語としてのモンテネグロ語は、おそらくそれをコミュニケーションの唯一の手段とする人びとのあいだに甚大な訝しみと戸惑いを引き起こすだろう。そのことの大きな理由として、近年までモンテネグロにおいてモンテネグロ語はタブーであったという事実が挙げられる。最近までのモンテネグロの公式の言語学は、モンテネグロ語の特徴を、セルビア語内部の方言、古形、地方形、そしてその他の様々なイズム(-izam)として扱ってきた。[……]⁽⁶⁵⁾

モンテネグロ人がみずからの言語を方言であると考えてきた背景には、「セルビア語」の存在があったとチルギチは論ずる。「長い、一世紀半もの公的コミュニケーションにおけるセルビア語使用の伝統は、モンテネグロ人のあいだに、彼らの言語特徴は地方的用法であり、そして確かに標準語の一部となるべきではないようなものだという意識を創出することに寄与してきた」⁽⁶⁶⁾のである。

また彼は、「歴史的事情(貧困、厳しい生活条件、度重なる戦争、等々)」⁽⁶⁷⁾によって教育と文化が周辺に位置づけられたモンテネグロでも、ニェゴシュ⁽⁶⁸⁾の代から教育に関心が払われるようになったが、その時代から現代まで、けして「モンテネグロが第一」ではなかったと主張する。彼によれば、ニコラ一世(Nikola I, 1841-1921, 在位 1860-1918)も、モンテネグロ人を独自の民族として発展させるような「ナショナル・プログラム(nacionalni program)」を持つてはいなかった⁽⁶⁹⁾。これによって、モンテネグロ市民はその属する国家において異物とされたのだと彼は述べる。ニコラは「セルビア性の陶醉(opijenost srpstvom)」⁽⁷⁰⁾を持っており、その長い治世を通じて独自の言語政策を追求しようとしなかったのだと論じられる⁽⁷¹⁾。そして戦間期ユーゴスラヴィアにおいてはキリル文字を用いる

(65) Čirgić, *Crnogorski jezik u prošlosti i sadašnjosti* (前注14参照), p. 21.

(66) *Ibid.*, p. 147.

(67) *Ibid.*, p. 172.

(68) ベタル二世ペトロヴィチ=ニェゴシュ (Petar II Petrović Njegoš, 1813-1851, 在位 1830-1851)。単に「ニェゴシュ」とのみいえば基本的に彼のことである。モンテネグロの主教公であり、詩人。ロシアの支援を得て最初の学校を開設し、印刷機を導入するなどした。彼の叙事詩は「セルビア文学」「モンテネグロ文学」の傑作とされている。社会主義期におけるニェゴシュの利用について詳しくは、前注24、および Andrew B. Wachtel, “How to Use a Classic: Petar Petrović Njegoš in the Twentieth Century,” in John Lampe and Mark Mazower, eds., *Ideologies and National Identities: The Case of Twentieth-Century Southeastern Europe* (Budapest: Central European University Press, 2004), pp. 140-145.

(69) Čirgić, *Crnogorski jezik u prošlosti i sadašnjosti* (前注14参照), p. 172.

(70) *Ibid.*, p. 174.

(71) *Ibid.*, p. 177.

イエ方言が周縁化されたと、同時代文献を引きながら論じる⁽⁷²⁾。チルギチによれば、

モンテネグロは、この地域の他のすべての国々と違って、独自の言語政策の欠如によって特徴づけられていた。[……]言語政策はセルビアの、まずはベオグラード、次いでノヴィ・サド——これらの都市の大学の言語学科には、何人かのすぐれたモンテネグロ人言語学者が勤務していた——によって行われた。[……]⁽⁷³⁾

社会主義期についても、チルギチの筆致は否定的である。ノヴィ・サド合意はモンテネグロの文章語を下位方言として、つまりセルビア語の下位方言として扱ったのだと彼はいう。そしてそのような主張はモンテネグロ人にも受容されていたとする。そうして彼は、大学やアカデミーはできたものの、「モンテネグロにおいても言語政策は行われたが、それはモンテネグロのものではなかった。その結果を考慮するならば、それは反モンテネグロのものであったといえるだろう」⁽⁷⁴⁾というのである。彼によれば、従来の言語政策は、①「セルビア語」の名称の氾濫、②モンテネグロ大の言語特徴の消去、「方言」としての取り扱い、③非典型的なエ方言型の採用、④nijesamやsjutraなどいくつかの特徴のみを採用（とはいえそれもšutraではなく、不完全）、などの特徴を持つという⁽⁷⁵⁾。彼はまた、ノヴィ・サド合意に基づいてセルビアのマティツァ・スルプスカとクロアチアのマティツァ・フルヴァツカが共同で作成した正書法『セルビア・クロアチア語文章語正書法(Pravopis srpskohrvatskoga književnog jezika)』（1960年）を、モンテネグロ語を方言と見なすようなカラジチの考えを踏襲しているとして槍玉に挙げる。彼は社会主義期の言語政策について、「共産主義政権のあいだ、イエ方言の地位は戦間期に述べられたよりは良かった、といわれる。しかしながら、1960年以来『セルビア・クロアチア語文章語正書法』の〈過度な柔軟性〉は、何人ものモンテネグロ出身の言語学者を満足させなかった」⁽⁷⁶⁾と評し、社会主義期の規範が、モンテネグロでは一部の単語における「エ方言化(ekavizacija)」⁽⁷⁷⁾を推進してきたとする。

そしてそのような文脈のもとで、前述のオストイチへの個人攻撃が展開される。オストイチらが編纂した辞書は、『(イ)イエ方言セルビア語辞典(Rečnik (i)jekavizama srpskog jezika)』というその表題からしてエ方言が使われており(イエ方言ならrječnik)⁽⁷⁸⁾、「モンテネグロ語の廃棄、同化、否定」⁽⁷⁹⁾であると、ニクチェヴィチによるオストイチ批判を引き

(72) *Ibid.*, pp. 177-179.

(73) *Ibid.*, p. 171.

(74) *Ibid.*, pp. 183-184.

(75) *Ibid.*, p. 184.

(76) *Ibid.*, p. 113.

(77) *Ibid.*, p. 114.

(78) *Ibid.*

(79) *Ibid.*, p. 118.

ながら数ページにわたってオストイチが攻撃される。またオストイチの影響力は若い世代の研究者にも及んでいると指摘され、標準化委員会の中にもヨット化を軽視する勢力があることが問題視される⁽⁸⁰⁾。そのような状況下で、モンテネグロPENセンターとマティツァ・ツルノゴルスカ、モンテネグロ語・言語学研究所、モンテネグロ文芸協会、ドゥクリャ科学芸術アカデミー⁽⁸¹⁾といった諸団体を「モンテネグロ語」のために尽力したとして称賛するのだ。一方で彼にとって、モンテネグロ科学芸術アカデミーが2007年に開催したシンポジウムは、モンテネグロ語・モンテネグロ民族・モンテネグロ国家の存在に疑問を呈しているの、受け入れがたいものであった⁽⁸²⁾。チルギチによれば、「モンテネグロにおける言語の標準化と言語計画は、概してセルビアの(拡張主義的な[ekspanzionistički])言語政策の一部でしかなかった」⁽⁸³⁾のである。

上述したようなモンテネグロ語のイデオロギーからは、セルビアを「敵」とする形でモンテネグロ語が編成されていることが読み取れよう。それはチルギチに限ったことではない。「セルビアによる抑圧」という歴史観は、ニクチェヴィチの著作にも見出される「モンテネグロ語」イデオロギーの重要な要素である。ニクチェヴィチの著作には、「政治的ヘゲモニー (politička hegemonija)」「文化的支配 (kulturna dominacija)」「エスノサイド (etnocid)」「セルビアの占領 (srpska okupacija)」「同化 (asimilacija)」「帝国主義的セルビア性 (imperijalno srpstvo)」などの語彙が頻出し、セルビアが過剰に悪魔化されている⁽⁸⁴⁾。モンテネグロ語はセルビア語と近く、同一言語であるという主張が容易であるがゆえに、モンテネグロ語の支持者たちはそのような主張を「帝国主義」と批判し、モンテネグロ人を「抑圧されてきた民族」と位置づけることによってセルビアとの境界を構築しているといえる。

おわりに

ここまでで検討した独立以降のモンテネグロにおいて「モンテネグロ語」を支える言語イデオロギーでは、次のような内外の境界の再編が行われていると指摘できる。

第一に、「モンテネグロ」の「内なる境界」の解消である。モンテネグロ内部に方言的分断は存在しないものとされ、「民衆語」に基づいた「モンテネグロ」の言語的一体性が強調される。佐野直子は近代ヨーロッパの言語イデオロギーを整理し、その一つとして、「言語は一定の具体的な地理的範囲を持っていると見なされる。[……]言語の領域は土地に根ざす

(80) *Ibid.*, pp. 133-135.

(81) 1976年に作られたモンテネグロ科学芸術アカデミーを「親セルビア的」として批判する独立派知識人たちが、1990年代に入って設立した対抗アカデミー。Morrison, *Montenegro* (前注20参照), p. 226; Wachtel, “How to Use a Classic” (前注68参照), p. 147.

(82) Čirgić, *Crnogorski jezik u prošlosti i sadašnjosti* (前注14参照), pp. 43-45, 188-190.

(83) *Ibid.*, p. 123.

(84) Trovesi, “La codificazione della lingua montenegrina” (前注11参照), pp. 212-213.

人々（農民）の話すことばが『記述』されることで決定づけられる」⁽⁸⁵⁾というものがあると述べるが、モンテネグロ語を支えるイデオロギーの根幹にあるのはまさにそのような思考である。

第二に、「セルビア」との「対外的境界」の創出である。「モンテネグロ語」は、「言語」の境界が曖昧であることを利用して、セルビア語との微少な差異を強調することによって成り立っている⁽⁸⁶⁾。そして「抑圧者」としてのセルビアが、モンテネグロという「われわれ」を立ち上げるための「かれら」として捉えられている。「モンテネグロ語」イデオロギーにおいて、セルビアは「歴史の新しい解釈におけるモンテネグロ民族の真の敵」⁽⁸⁷⁾となっている。セルビアはその「拡張主義」「帝国主義」によって、常に「モンテネグロ語」とモンテネグロの文化を脅かし、同化しようとしていたとされるのである。

「モンテネグロ語」を支える言語イデオロギーにおける内外の境界の創出には、ブロンマールトとヴェルスヒューレンが指摘するようなナショナリズムの逆説を見て取ることができよう。みずからは差異があることを論拠にして分離を正当化するが、その論理で下位集団が分離しようとすることは認めることができない⁽⁸⁸⁾。ゆえに対外的境界が熱心に構築される一方、内なる境界の解消が図られる。二つの境界がそのように再編されることによって、「言語」は成立するのである。本稿はその境界再編の具体的過程を検討した。だが本稿では「モンテネグロ語」を支持する人びとのうち目立った活動をしている人びとを取り上げたにすぎず、より多様な立場に属する人びとの言説を汲み取れていない。また、そうやって作られた「言語」が内実を伴っているかどうかは別の話である。その検討は別稿⁽⁸⁹⁾にて行いたい。

(85) 佐野直子「すべての言語は平等である。しかしある言語は、ほかの言語よりさらに平等である：ヨーロッパの『多言語状況／多言語主義(Multilingualism)』と少数言語」砂野幸稔編『多言語主義再考：多言語状況の比較研究』三元社、2012年、59頁。

(86) ニクチェヴィチはイタリア語とカスティーリャ語の違いを引き合いに出して、それらの差異は別言語とするに足るものだと論じた。Trovesi, “La codificazione della lingua montenegrina” (前注11参照), p. 207, n. 32.

(87) *Ibid.*, p. 212.

(88) Blommaert and Verschueren, “The Role of Language in European Nationalist Ideologies” (前注4参照), p. 198.

(89) 中澤「『モンテネグロ語』の創出」(前注19参照)、193-197頁。